

ふも、みな故あることなり、

〔阿邪名呼名考〕阿邪名

そもこの太郎次郎八郎十郎などいへることは、そのもとは必ず定りたる字のごとくにはあらで、今世に長男次男八男十男といへるがごとき意にて呼びそめたるものにて、さやうに用ゐたるはた多く書ごもにみえたり、そは世繼物語の悦の巻に、只今の大殿は、三郎にこそはおはしましけれ云々、一條の右大臣殿は、九郎にぞおはしける○中略などやうに用ゐたる猶あまたみえたり、さればかの字を太郎とも何太ともいへるは、その父の第一男なる義次郎とも何二ともいふは次男、三郎何三は三男、十郎は十男、餘一郎とも與一ともいへるは十一男、餘三は十三男、與五郎は十五男、十八男のことなるを、十一郎十八郎といはずして、餘一郎餘八郎としもいへりしは、十餘一郎十餘八郎の義にして、その十の字を省きたるものなり、されば餘一餘二と書くべきを、古より與一與二とかけるもあるは、たゞ音の同くて、かきよき文字を借用ゐたるものにて、異なる義あるにはあらずなむ、今のなべての世の人は、さること、しも心得ぬげに、兄なる子にも、與一、與三、何十郎、何五郎など號け、弟には何太郎ともつくる類も、まれ／＼あるは、むげに物え辨へぬ人々のことにしあめれば、いかゞはせむを、さる分際にはあらで、かの太郎次郎の次第など、よく心得ためる人々のなか／＼に、餘一郎をば何太郎の異稱とや思ひとれる、慎一郎守一郎といふやうなる名も聞ゆる中に、わが太郎子をも、一郎などなづくる類も出來にけるは、何も昔の跡をばよくもたざらで、古のことをたゞ等閑に思ひすぐせる心ぐせにて、いと淺ましく口惜しきことなりかし。○中略

この太郎次郎などいふ字をしも、今俗間の人々は、生るすなはち號ること、思ひためれど、縁子の名などには、いと似つかずなむ有ける、故むかしの人々は、いと幼きほどは、まづふさはしき幼